語義の特殊化と分化

——外来語「デリケート」の場合——

工　藤　陽　子

〔0〕 はじめに

「女性のデリケートな肌を考えたお手入れのツールです」

上の例は，某化粧品メーカーの商品のパッケージに見られたものであるが，このような「デリケート」の用例は，日常しばしば目にすることができるであろう。この「デリケート」という語は，現代の小型国語辞典のいずれもが見出し語としてあげている語である。

『日本語百科大事典』（大修館書店，1988）では，「外来語」について，

> 他言語から借り入れた語や句で，特に固有の語に同化し，固有の語と同等に見られるようになったもののことを言う。ただし，固有の語と同等であるかどうかは客観的に判定できないので，人により外来語か外国語か見方の分かれる場合のあるのは避けられない。[①]

としているが，こうしたことから考えると，本稿でとりあげようとしている「デリケート」は，今やすっかり「固有の語に同化し，固有の語と同等に見られるようになった」外来語の一つと言えるだろう。

以下，この外来語「デリケート」の語義について，通時的な視点から見ていくことにする。

〔1〕 現行小型国語辞典における語義記述と現代の用例

語義の変遷を考えるうえで，まず，外来語「デリケート」が今日どのような意味をもつ語として定着しているのかを，確認しておきたい。

すでに述べたように，「デリケート」については，現行小型国語辞典のいずれもが見出し語として記載し，語義説明を行っている。まず，そうした辞書における語義説明のいくつかをとりあげて見てみることにする。

A：①心や体などが，鋭敏で，繊細なさま。②微妙なさま。

B：①ちょっとした刺激や変化に・も感じやすい（対しても傷つき，全体の調子が狂いやすい）様子。繊細。②ちょっとした解釈の相違により局面・結果が大きく分かれそうで，扱いがむずかしい様子。

C：①敏感で心づかいが細かいさま。繊細。②微妙なさま。

D：①感じやすく繊細なさま。②微妙なさま。

Aは『現代国語例解辞典（第二版）』（小学館，1993），Bは『新明解国語辞典（第四版）』（三省堂，1991），Cは『角川新国語辞典』（角川書店，1990），Dは『集英社国語辞典』（集英社，1993）の語義記述である。このように並べてみてまず気付くのは，ここでとりあげた辞典においては，いずれも二つの意味項目を設け，先の方では「繊細」，後の方では「微妙」という語を用いて語義説明を行っている[②]という点である。

次に，先の語義記述において「繊細」という語の他に，Aでは「鋭敏」，Bでは「感じやすい」，Cでは「敏感」，Dでは「感じやすく」といった語が見られるのが注目される。つまり，このことから外来語「デリケート」は，今日では「感覚の繊細さ」を表す語と言えそうである。ちなみに『現代国語例解辞典』で「繊細」という語について調べてみると，

①物の形が細かく小さいこと。細々として優美なさま。

②感情などがこまやかであること。微妙であるさま。デリケート。

とある。②の方に「デリケート」という語が見られることからもわかるように，「デリケート」の第一の語義は，この「繊細」の②の語義にあたる。

以上のことから，外来語「デリケート」は，今日では一般に「感覚・感情などの繊細さ」と「微妙なさま」を表す語とされていると言えるだろう。

これらのことを現代の下記の用例によって，確認しておきたい。

a　日本人には限られた空間の中に遠近の差を相対的に設定するというデリケートな感覚が早くから芽生えていた（槇文彦「奥の思想」『見えがくれする都市』1980）

b　視覚に訴えるコミュニケーションの中で色や模様はとくにデリケートな感情や意志を伝えるのに欠かせない手段の一つだからだ。（永戸豊野『動物たちはこうして会話する』1996）

c　案内して下すったカルロス氏に「あれは……」と聞きかけたところ，西郷隆盛のような外見に似ず，デリケートな氏は少し口ごもって，「一種の精力剤ですな」とドギマギなさった。（向田邦子「チョンタ」『銀座百点』1972）

d　おまえが行ってから，朝こいつがいつも散歩してた時間にすげえ声で鳴くの。

デリケートなあたしはいつもそれで目が覚めちゃってさ，（吉本ばなな『TUGUMI』1989）

e　わたしは音楽のことはわかりませんが，きみがとてもデリケートな人だということは感じました。直美もデリケートな子です。（三田誠広『いちご同盟』1990）

f　配偶者の有無，学歴，職業など，調査項目の中にはかなりデリケートなものも含まれている。（1995年9月30日毎日新聞朝刊――国勢調査への不信や悩み　市民団体が相談電話開設――）

g　「―（前略）―茶髪・ピアス問題に結論がでなくても子供たちが考えることで成長につながる。文化祭の劇を作り上げる中で，デリケートな茶髪・ピアス問題を論議したのは大変いいことだ」と話している。（1996年11月2日毎日新聞朝刊「NIE教育に新聞を」――劇で茶髪・ピアス論争――）

h　若い女性が会話していて，Aの話にBはあまり関心がないとする。―（中略）―Aの話に興味がある時は「そうだよね」，ない時は「そうなんだなあ」。実にデリケートでしょう。（清水義範「なぜ近ごろの若い娘はやたらに『むかつく』のか？」1996年12月18日毎日新聞夕刊）

用例a～eは，現行小型国語辞典における第一の語義（繊細），用例f～hは，第二の語義（微妙で扱いがむずかしい）での使用例と考えられる。

用例a～eについて，以下，もう少し詳しく吟味しよう。用例a，bでは，「デリケート（な）」のすぐ後に「感覚」「感情」といった語が続いており，ここでの「デリケート」が辞書の語義記述に見られたように「感覚・感情などの繊細さ」を表していることは明らかである。用例cでは，「デリケート（な）」はすぐ後の「氏」にかかっていくが，前に「外見に似ず」とあることから，ここでの「デリケート」が「氏」の外見ではなく内面の繊細さを表していることがわかる。用例d，eにおいても，「デリケート（な）」という語は，すぐ後の「あたし」，「人」，「子」といった人を表す名詞にかかっている。これらについては，用例cの場合のようなこれという決め手になる語句はない。しかし，どれもそれぞれの文脈からその人物の容姿などの外見ではなく，内面の繊細さを表していることがうかがえる。つまり，今日「デリケート」という語が「繊細」の意味で用いられる場合，それは外見ではなく内面の繊細さを表す語として用いられていると言えよう。

ちなみに，先にあげた小型国語辞典をはじめとする現行の辞書の多くは，第一の語義については「デリケートな神経」や「デリケートな心」，第二の語義については「デリケートな問題」を用例としてあげている。

〔2〕 外来語「デリケート」の普及および使用開始時期

本稿の冒頭で，「デリケート」は，今やすっかり「固有の語に同化し，固有の語と同等に見られるようになった」外来語の一つであると述べたが，では，この語が外来語として用いられるようになったのは，いつ頃であろうか。

『外来語辞典』（楳垣実編，1966）や『基本外来語辞典』（石綿敏雄編，1990）には，それぞれの外来語の語義の後に使用普及時期が示されているが，それによるとこの語の使用普及時期は「大正時代」となっている。

また，筆者はかつて，芥川龍之介，有島武郎，志賀直哉，田村俊子の4人の作家の大正期の作品，計約70編における外来語の使用実態について調査を行った[③]が，この語は，この4人の作家の作品に共通して見られた唯一の外来語系形容動詞[④]であった。このことからも，この語が大正期にはかなり普及していたことは明らかである。

もっともこれは，『基本外来語辞典』の凡例にも明記されているように，あくまでも「その語またはその語義がある程度普及したと推定される時代」であって，使用開始時期（初出）ではない。

米川明彦（1985[⑤]）は，近代における外来語の定着過程を見るために幕末から昭和初期までを4期に分け，それぞれの時期における特徴を述べているが，その第2期（明治20年代から第1次世界大戦まで）の特徴として，「例のセンチメンタルな感情が烈しく胸に迫って来て」（田山花袋「田舎教師」明治42年）などの例を示し，外来語系形容動詞が使われるようになったことをあげている。そこでは「デリケート」については，特に触れてはいないが，この語についても，おそらく「センチメンタル」などと同様，明治の終わりごろから使われるようになったものと見てよいだろう。

現在「デリケート」の最も早い時期の用例として把握できているのは，次のような例である。

i　四囲の風物が身に滲みて来る，多感的な（デリケート）頭は一層感受性になつて，（小栗風葉『青春』明治39）

j　無論デリケートな問題であるから滅多に聞けるものではない（夏目漱石「趣味の遺伝」『帝国文学』明治39）

k　デリケート，センスの淑女紳士の前では言い及ぶまじき事柄であった，（島村抱月「沙翁の墓に詣づるの記」『早稲田文学』明治39）

なお，用例i，jについては『日本国語大辞典』が，kについては『角川外来語辞典』（荒川惣兵衛編，1967）が用例としてあげている。

〔3〕 明治期の用例

〔2〕であげた3つの用例i，j，kの他に，明治期の用例としては次のようなものがある。

l　殊に小さい耳が，日の光を透してゐるかの如くデリケートに見えた（夏目漱石『それから』明42）

m　尤も馬鹿気た感じの薄い所にデリケートなところがある。それが都会的な所以である。彼等の通人粋客たる所である。通人酔客とはデリケートの必要なき瑣事迄，手段をかけてデリケートたがるものである。（夏目漱石『文学評論』明治42）

n　「スバル」の短歌は，従来稀れに見る平明の調と文字とを以つて，最も奔放なる熱情と最もデリケートなる感覚を歌はんとするものである。（徳田秋江「文壇無駄話」『読売新聞』明治43）

o　いつかの手紙にも紹介しといた又男さんは元気で柔順しい，大概僕の室へ来て画を描いてゐるが，この子の眉は阿母さんに似てデリケートだ，（三木露風「湖畔より」明治44⑥『白き手の猟人』所収）

以上のような明治期の用例について，指摘すべきことがある。まず，用法の面で，用例kにおいて，間に和語成分（「な」）を挟むことなく直接「センス」という外来語名詞に続き，複合語の形で用いられている点，用例mにおいて，明治期の一般的な表現と同じく「デリケートの必要」というように格助詞「の」を従えている点，「デリケートたがる」というように動詞または助動詞に続く助動詞「たがる」を後に伴って用いられている点が注目される。今日では「デリケート」という語は，a～hのような現代の用例を見ても分かるように，後ろに和語成分を伴った形容動詞の形で用いられることが多く，上の例のような用例はまず見られない。なお，用例oにおいて「デリケートなる」という古典語の形容動詞の形が見られるのも時代を反映したものと言えるだろう。

次に，語義の面だが，用例i，j，k，nについては現代の小型国語辞典の記す語義（i，k，nについては「感覚・感情などの繊細なさま」，jについては「微妙で扱いが難しいさま」）があてはまると考えられるが，用例l，oのように辞書の記す語義にあてはまらないものが見られるという点が注目される。「デリケート」という語は，今日では一般に感覚や感情など内面的なものの形容に用いられているのに対し，用例l，oでは「耳」，「眉」のような外見上の形容に用いられているという点が特徴的である。なお，これらの用例の語義については，次の「〔4〕大正期の用例」において，さらに詳しく検討することにしたい。

〔4〕 大正期の用例

外来語辞典がこの語の使用普及時期を大正期としているように，大正期になると，かなり多くの用例が見られる。また，用法の面でも，〔3〕で見たように，明治期においてはさまざまな形で用いられていたのが，今日のような和語成分を後ろに伴った形容動詞の形に落ち着いてくる傾向にある。[7]

ただし，語義の面では，現行小型国語辞典などの語義に該当するものも多いが，明治期と同様，現代とは異なる用例も少なくない。

そこで，そうした現代とは異なる用例について吟味しよう。[8]

p　いさちゃんが三角さんから花を貰って帰ってくる。—(中略)—大きな美事な薔薇が二輪とあかいカーネーション，デリケートな雛芥子（田村俊子　日記　大正7年6月1日　＊『田村俊子作品集』第三巻所収）

q　その顔は，体に比べては少し小さく見えたけれども，きりつとひきしまつてゐた。デリケートな輪郭ではなかつた。（有島武郎『迷路』大正7）

r　少年から青年になったばかりのような，内気らしい，小柄な岡の姿は，何もかも荒々しい船の中ではことさらデリケートな可憐なものに見えた。（有島武郎『或る女』前編・14章　大正8）[9]

s　葉子はいつまでもそのデリケートな横顔を注視つづけた。（有島武郎『或る女』後編・35章　大正8）

t　あまりに大きな網の目から，デリケートな魚は太い糸の間をさよならといふであらう。（佐藤春夫「僕の詩について」『日本詩人』大正14）

ここにあげた用例は，「〔3〕明治期の用例」において語義の面で問題にした用例l，oと同様，現行小型国語辞典などがあげている「デリケート」の第二の語義（微妙で扱いが難しい）には勿論のこと，容姿や形状の形容という点で，第一の語義（感覚や感情が繊細である）にも相当しないものである。

そこで，〔1〕でとりあげた「繊細」の語義について，ここでもう一度振り返ってみることにする。現行の小型国語辞典の「繊細」の項を見ると，第一に「物の形が細かく小さいこと，細々として優美なさま。」，次いで，今日の「デリケート」の語義に当たる「感情などがこまやかであること。微妙であるさま」といった語義をあげている。今，ここで問題にしている用例p～tや明治期の用例l，oこそ，この「繊細」の第一の語義の例となるのではないだろうか。（用例p，q，r，sについては「ほっそりとして優美な」，tについては「ものの形が細かく小さい」の意で用いられたものと考えられる。）

【資料１】 英和辞典における“delicate”の語義記述

ジーニアス英和辞典 （大修館書店　1989）	1 〈容姿・形状などが〉優美な，上品な；〈感覚などが〉繊細な，きめの細かい 2 〈機械などが〉精巧な，精密な；〈計器などが〉敏感な，鋭敏な 3 〈身体が〉か弱い，虚弱な，きゃしゃな；〈物が〉こわれやすい 4 〈色・においなどが〉柔らかい，ほのかな，薄い 5 〈問題などが〉扱いにくい；細心の注意〔こつ〕を要する；〈人が〉慎重な，手ぎわのよい；微妙な 6 思いやりのある，よく気のつく；慎み深い 7 〈食物などが〉おいしい，あっさりしている
ランダムハウス英和辞典　第２版 （小学館　1994）	1 〈感触・形状・色・容姿などが〉繊細な，きめの細かい，優美な，きゃしゃな，ほっそりした 2 〈物が〉壊れやすい，もろい；傷つきやすい；〈人・体が〉弱い，虚弱〔ひ弱〕な 3 （ほとんど感じられないほど）かすかな，微妙な 4 〈色・光などが〉柔らかな，ほのかな，淡い 5 微妙な差異を識別する，鋭敏な；〈計器などが〉敏感な，感度のいい〔高い〕，〈機械などが〉精巧な，精密な 6 〈問題・仕事などが〉細心の注意を要する，こつのいる，扱いにくい，難しい 7 〈人が〉細かく神経を使う，慎重な 8 〈人が〉洗練された；感性の鋭い；〈好みなどが〉品位がある，典雅な 9 （正しい行為・作法などに）細かく気を配る，気配りが細やかな，慎み深い 10 〈言葉などが〉思いやりのある，よく気のつく，丁重な 11 〈食べ物などが〉上等の，高級な，（あっさりして）おいしい，風味のよい；〈香りが〉（強くなくて）快い 12 〈好みなどが〉気難しい，やかましい，潔癖すぎる 13 《廃》感覚的な，官能的な

なお，類例は昭和初期においても見られる。

デリケートな顔立ちのつくりに似合ふ浅い頭髪のウエーヴ，（岡本かの子「鶴は病みき」『文学界』昭和11）

ところで，外来語の語義について考える場合，やはり原語の語義についても見ておく必要があるだろう。【資料１】は『ジーニアス英和辞典』と『ランダムハウス英和大辞典』の語義記述であるが，これを見ると，原語“delicate”が多くの語義をもつ語であること，その中でもここで問題にしている「容姿や形状などが繊細な，優美な」といった語義が第一にあげられていることが注目される。こうしたことから英語の“delicate”が外来語として受け入れられる際，大幅に語義が縮小し，今日のように定着する過程にお

いて，さらに「容姿や形状」の形容については漢語を用い，「感覚や感情」などの形容のみに用いるというように語義の縮小化（特殊化）が進んだとみることができる。

〔5〕 大正から昭和初期にかけての新語辞典および外来語辞典における語義記述

ところで，大正から昭和初期にかけて外来語が著しく増加し，それにともなって多くの外来語辞典や新語辞典が出版されたことはすでに先行研究の指摘するところである。それらの中には通俗的なものも多いが，当時の人たちがこの語の語義をどのようにとらえていたかを知るうえでは参考になると思われる。

【資料２】は，大正期に刊行された新語および外来語辞典における「デリケート」の語義記述である。現行の小型国語辞典の語義記述に見られる「繊細」「微妙」「敏感」といった語が見られる一方，いくつかの辞典において「優雅」「優美」といった語が見られる点が注目される。

【資料３】は，昭和初期に刊行された新語辞典および外来語辞典における「デリケート」の語義記述である。ここでもやはり大正期のものと同様，あるいはそれにもまして，

【資料２】 大正期の新語辞典および外来語辞典における「デリケート」の語義記述

文学新語小辞典 生田弘治(著)（新潮社　大正２）	繊細なる，微妙なる，又は敏感なる ※見出し語…「デリケット」
外来語辞典　附新語及神話小解 勝屋英造(編)（二松堂　大正３）	敏感なる。雅致ある。優雅なる。微妙なる。
新文学辞典 生田長江・森田草平・加藤朝鳥(編) （新潮社　大正７）	繊細なる，微妙なる，又は敏感なると訳す。
現代新語辞典 時代研究会(編)　耕文堂　大正８）	微妙なる，繊細なる，優美なる，敏感にして感じ易きこと。
模範　新語通語　大辞典 上田景二(編)（松本商会　大正８）	敏感にして繊細なる情緒の形容。
現代日用　新語辞典 小林鴬里(編)（文芸通信社　大正９）	繊細なる，微妙なる，敏感なる等と訳す。
新しき用語の泉 小林花眠(編著) （帝国実業学会　大正11）	繊細なる，敏感なる，感知し易き，病気に罹り易き，例えば詩歌や絵画などを評して，「デリケート」な作品といえば，繊細な作品，敏感な作品であるとの意味である。
英語から生まれた　新しい現代用語辞典 上田由太郎(著) （駸々堂出版部　大正14）	微妙なる，精緻なる。優旁なる。艘諏なる。言語に絶した物の快味を形容する語。

【資料３】 昭和初期の新語辞典および外来語辞典における「デリケート」の語義記述

音引正解　近代新用語辞典 田中信澄(編)（修教社書院　昭和３）	繊細なる，微妙なる，しなやかで優雅なと云ふ様な意味。
文芸大辞典 菊地寛(校閲)・斎藤竜太郎(編著) （文芸春秋社　昭和３）	優しき，優美なる，優雅なる，雅味ある，感知し易き，いみじき，弱々しき等の意。
時勢に後れぬ　新時代用語辞典 長岡規矩雄(著) （磯部甲陽堂　昭和５）	微妙。精緻な。優美な。　≒「恋愛用語」の部 微妙な。　≒「新時代用語」の部
国漢外語辞典 高野辰之・芝染太郎(編) （宝文館　昭和５）	①びみょう（微妙）②せいこう（精巧）③ゆうび（優美）
アルス　新語辞典 桃井鶴夫(編)（アルス　昭和５）	微妙な，云ふに云はれぬ，精緻なといふやうな意味で説明しにくい言葉である。「デリケートの感じのする絵だ」と云へば，何となく弱々しい，力のないといふやうな意。「デリケートな味がする」と云えば，云ふに云はれぬ甘い味がするとの意。
現代新語辞典 ＊「現代」第12巻第１号付録 （大日本雄弁会講談社　昭和６）	微妙な，と訳すが，本当の意味が表れない。千番に一番のかね合ひ，有るか無きかの物のあや，言語に絶した心持，何ともいへぬ精緻な美しさなどを『デリケートだ』といふ，『なかなかデリケートの問題だから露骨にいへない』といへば，至難な，危険を孕んだ，きはどい，などの意味となり，『この造花は実にデリケートに出来てゐる』といふのは，精巧な造花のこと。
日本語となった英語(改訂版) 荒川惣兵衛(編注)（研究社　昭和６）	優美な，美しい，精巧な，虚弱な，上品な，面倒な，云ひ難い，きはどい。
これ一つで何でも分かる　現代新語集成 小山湖南(著)（博隆館　昭和６）	微妙なる，精緻なる，優雅なる 『恋愛関係はデリケートな問題だ』など
分類式　モダン新用語辞典 小島徳弥(著)(教文社　昭和６）	優しき，柔らかな，繊細な，手際よきの意。(例)「君にはとても僕のデリケートな気持がわからぬと思へるな。」
モダン語辞典 鵜沼直(蕉)(誠文堂　昭和７）	微妙，優雅，繊細の意。その感じがデリケートである，その味がデリケートである，その関係がデリケートであるなどと用ひられ，何ともいへないやうな感じのすること。複雑な状態にあることをデリケートな状態にあるなどともいふ。
新文芸辞典 菊地寛(著)（誠文堂　昭和７）	優美なる。弱々しい。いみじき　などの意。
常用　モダン語辞典 伊藤晃二(著)（好文閣　昭和８）	優美な，麗しい，嫋やかな，繊細な，微妙な，繊弱なる，弱々しい，感じ易い。例へば詩歌などを評して「デリケートな作品だ」といへば「優美な作品」のことで「これは甚だデリケートな問題だ」といへば云ふにいはれぬ「微妙な事柄」であるといふ意味である。

多くの辞典に「優雅」「優美」などの語が見られる。また，大正期のものに比べ，多くの語義を列挙したものや，用例をあげて，それぞれの場合における語義を示したものが見られる点が興味深い。これらのことから，当時は「デリケート」という語が，一種の流行語のようなかたちで，いろいろな場面で盛んに用いられていたことがわかる。

〔6〕 外来語「デリケート」と漢語「繊細」

本稿ではこれまで，現行の全ての辞書類が「デリケート」の語義（訳語）としてあげている「繊細」という語に注目し，明治末から大正および昭和初期にかけての用例について見てきた。〔5〕であげた外来語および新語辞典の語義記述を見ると，大正期において，すでに「デリケート」の訳語として「繊細」という語が広く用いられていたようであるが，語義記述の中に「繊細」の語の見られないものも少なくない。このことから，当時はまだ今日ほどには，「デリケート」=「繊細」というとらえ方に限定されていなかったのではないかと思われる。

こうしたことについては，すでに『現代用語の基礎知識』（1977年版）の「明治大正年代別外来語・雑学抄」が

> デリケートな指，デリケートな心，デリケートな娘，などの使い方が明治末期の文学作品に多く見られるが，大正期に定着する。繊細なのは（ママ）訳はあとから。[10]

と指摘している。

そもそも，英語 “delicate” はどのような語義として日本に入って来たのだろうか。実際に，『英和対訳袖珍辞書』（文久２年刊），『英和双解字典』（明治19年刊），『附音挿図和訳英字彙』（明治21年刊），『明治英和字典』（明治22年刊），初版から第３版までの『和英語林集成』の「英和の部」など，明治20年代前半までの英和辞典の類を調べてみたが，“delicate” の項に「繊細」の訳語は見られなかった。

さらに興味深い事実は，今日ではどんな小型国語辞典においても見出し語として見られる「繊細」という漢語が，『言海』（大槻文彦編，明治24年刊）をはじめ『日本大辞林』（物集高見編，明治24年刊）など明治前半の辞書の見出し語に見られないということである。この頃の用例として，

> 蓋し女性は優美繊細なる者なり，而して詩家も亦た其思想に於いて優美繊細を常とする者なり，（北村透谷「厭世詩家と女性」『女学雑誌』明25）

をあげることができるが，当時はまだ「繊細」という語がそれほど広く用いられていなかったということであろう。

なお，「繊細」という漢語については，佐藤亨（1978）[11]が『重訂解体新書』（文政９年

刊）に見られる漢語のなかで「漢籍または漢訳仏典に典拠を見出しえず，更に国語の用例も確かでないもの」の一つとしてあげている。『重訂解体新書』には次のような「物の形が細かくかぼそい」の意での用例が見られる。[12]

複則纖—細、數—筋。聚會、爲質也　（本文巻之四　筋篇）

皆纖—細絲—條之義也　（名義解巻之一　身体元質篇　纖の項）

「纖細」の用例として現在筆者が確認できているのは，明治以前のものとしてはこの『重訂解体新書』の用例のみであり，明治期のものについても先にあげた透谷の「厭世詩家と女性」の用例のほかに数例だけである。

ところが，外来語「デリケート」が普及したと言われる大正期になると，

- 近代人の纖細な感覚に快い反応を起こしうる事は到底不可能である。（北原白秋「桐の花とカステラ」『桐の花』大正２）
- 彼女の纖細な感覚は，何時だって美しいもの優しいもの，柔らかなもの愛深いものに触れることを好んでいたのであった。（田村俊子「破壊する前」『大観』大正７）
- あの校正とルビには，神経の纖細で鳴る芥川氏の事だ，嘸ぞ其の美しい眉を顰めた事だらう。（「五月の雑誌」『時事新報』大正７）
- 極端にモダアニズムの洗礼を受けて，神経と感覚が敏感になり，纖細になり，（広津和郎「新人佐藤春夫氏」大正７）
- 家の中のいさくさなどに纖細すぎる神経をなやまして，（有島武郎『或る女』後編・32章　大正８）

など，「感覚や感情などがこまやかである」の意での用例が多く見られるようになり，辞書などの見出し語としても見られるようになる。

さて，現行漢和辞典における「纖細」の語義記述にも注目してみたい。

【資料４】を見ると，『大漢和辞典』では，「こまかい。かぼそい。」とだけあるが，それ以外のものでは，二つの意味項目を設け，「こまかい。かぼそい。」の語義のほかに「感情が細かく鋭い。」といった語義をあげている。そして『角川大字源』や『新版漢語林』においては，この二つめの語義に，もともとの中国での語義ではなく日本で生まれた語義であることを示す国の記号が記されている。

そこで，中国での「纖細」の語義を調べるため，『辭源（修訂本）』（商務印書館，1982），『漢語大詞典』（漢語大詞典出版社，1992）にあたってみたが，前者では「细微。」，後者では「①细微。②细长柔美。多形容女子身材。」といった語義記述が見られるだけで，その用例からも，「感情が細かく鋭い」といった語義は考えられない。さら

【資料４】 漢和辞典における「繊細」の語義記述

大漢和辞典　改訂版 （大修館書店　1985）	こまかい。かぼそい。
廣漢和辞典 （大修館書店　1982）	①ほそくこまかい。かぼそい。 ②感情が細かく鋭いこと。微妙なこと。デリケート。
角川　大字源 （角川書店　1992）	①こまかい。かぼそい。 ②国 感情が細かく鋭いこと。
新版　漢語林 （大修館書店　1994）	①ものの形が細かくかぼそい。 ②国 感情が細かく鋭いこと。微妙なこと。デリケート。

に，北京外国語学校編『詳解日中辞典』（光生館，1983）の「繊細」の項を見ると，

①纤细。☆～な指／纤细的手指。

②（感情，神经）细腻，敏感。☆～な感情／细腻的感情。☆～な神经／敏感的神经。

とあり[13]，中国語では「感情が細かく鋭い」といった意では，「繊細」ではなく「細腻」を用いるようである。

「デリケート」と「繊細」の関係について，諸資料を調べた結果，次のようにまとめることができる。

漢語「繊細」は，もともと日本においては広く一般に用いられていた語ではなかった。それが「デリケート」の訳語として，もともとの「物の形が細かくかぼそい」という意のほかに，「感情が細かく鋭い」といった語義を持つようになり，外来語「デリケート」の普及とともに広く用いられるようになった。そのうち，物の形などの形容についてはもっぱら漢語「繊細」が，感情や感覚の形容については漢語「繊細」と外来語「デリケート」が併行して用いられるようになった。

〔7〕 おわりに

本稿で述べてきたことをまとめると，次のとおりである。

(1) 外来語「デリケート」は，今日では一般に，感覚や感情などが繊細である，微妙で扱いがむずかしい，といった語義で用いられているが，明治末から昭和初期にかけては，容姿や形状など外見上の繊細さ，優美さを表す語としても用いられていた。

(2) 現行の全ての辞書類が「デリケート」の語義（訳語）としてあげている「繊細」という漢語は，もとは「物の形が細かくかぼそい」といった語義しか持たず，（日本において）それほど広く用いられていた語ではなかったが，「デリケート」の訳語として「感情などが細かく鋭い」といった語義を持つようになり，外来語「デリケート」の普及とともに広く用いられるようになったのではないか。

なお，今後の課題として，昭和期の用例の蒐集を図ること，それぞれの語義変化の生じた時期の特定を行うことなどがある。

今回は詳しくとりあげることのできなかった大正期の「デリケート」の用例[14]は，当時この語が，一種の流行語（新語）として，また今日のように（外来語としての）語義が固定化していなかったこともあって，多様な共起語とともに用いられていて，多様な場面で盛んに用いられていたことを推測させる。

今後，上述の点も含めて，「デリケート」の語義およびその変遷について，さらに調査と考察を進めたい。

注

① 『日本語百科大事典』424ページより引用。

② ここにあげなかった他の多くの小型国語辞典においても同じような記述が見られる。『岩波国語辞典』では，二つの意味項目に分けることなく「繊細であるさま。微妙なさま。」と列挙している。

③ 工藤陽子（1994）「大正期の外来語の諸相――有島武郎・芥川龍之介の文学作品に見られる外来語――」（同志社大学大学院文学研究科，修士論文）および第254回同志社国語学研究会（1995）での口頭発表。

④ 本稿では，次項にあげる米川氏の論文が「センチメンタルな」のようなものを外来語形容動詞としているように，「デリケートな」を外来語系形容動詞として扱っているが，『大辞林』（三省堂，1988）などでは，「混種語」の項に，

> 互いに異なる語種に属する二つ以上の要素が結合してできている単語。「重箱」（漢語と和語），「アルバイトする」「デリケートな」（外来語と和語），「リズム感」「原子力エンジン」（外来語と漢語）などの類。

と記し，「デリケートな」を例示している。

⑤ 米川明彦「近代における外来語の定着過程」『京都府立大学生活文化センター年報』第9号

⑥ 『白き手の猟人』は大正2年に刊行されたが，その序には「この集は四十三年から今年まで大凡三年間の作を輯めた」とあり，「湖畔より」については文末に「四十四年十二月」と記されている。

⑦ 大正期においても，

- 片山伸氏の「露国劇壇の現状」は，―（中略）―其の観賞力のデリケートを裏書きするものがある。（「五月の雑誌から」『時事新報』大正7）
- これは併し頗るデリケートの問題で，（江見水蔭「『硯友社側面史』纏まらぬ記憶」『早稲田文学』大正15）

というように名詞としての用例や，「―な」ではなく助詞「の」を伴った例が見られる。

⑧ 以下のｐ～ｔの用例のほかに，この時期の現代とは異なる用例として，北原白秋「桐の花とカステラ」（大正2，『桐の花』所収）の

- 市井の俗人すらその忙しい銀行業務の折々には一鉢のシネリヤの花になにとはなきデリケエトな目ざしを送ることもあるのではないか。
- 四十過ぎた世帯くずしの仲居が時折わかい半玉のやうなデリケエトな目つきするほど

さびしく見られるものはない。

をあげることができる。ただし，これらの用例については，俄には語義を確定しにくい。

⑨ 『或る女』前編と後編は，有島武郎著作集第８輯，第９輯として，ともに大正８年に３カ月を隔てて刊行された。ただし，後編が新作であるのに対し，前編は明治44年１月から大正２年２月まで『白樺』に断続的に連載された「或る女のグリンプス」の改作である。

⑩ 『現代用語の基礎知識』1977年版（自由国民社）1154ページより引用。なお，「明治大正年代別外来語・雑学抄」は，上野景福監修，横井忠夫・村石俊夫編集。

⑪ 佐藤亨「『重訂解体新書』の漢語」『国語と国文学』第55巻１号

⑫ 以下は大阪府立中之島図書館蔵『重訂解体新書』（杉田玄白訳・大槻玄沢重訂，文政９年刊）からの引用。

⑬ 『岩波日中辞典』（1983）の「繊細」の項においても，「彼女は繊細な感受性を持っている」という例文には「她具有细腻的感受性」，「繊細な指」という例句には「纤细的手指」「纤指」の中国語訳をあてている。

⑭
- 私の頭が非常にデリケートに働くようになって，神経が始終歯車にでもかけられているようです。（田村俊子『彼女の生活』大正４）
- 無数の暗示がデリケートに離合集散してゐると見るべきである。（西宮藤朝「知的興味の文芸を排す(上)」『時事新報』大正６）
- いよいよ損な，さうして極めてデリケートな役目である。（森田草平「新秋の創作を読む」『時事新報』大正６）
- 私に感動を与えて呉れた作家に対する私のデリケエトな要求を，何処までもデリケエトに，デリケエトに了解して貰ひたい（広津和郎「新人佐藤春夫氏」『雄弁』大正７）
- 彼がおべんちやらはなかなかデリケートで気が利いてゐて，且つどことなくわざとらしくない一種小悪党のもつ愛嬌，可愛げを持つてゐたからでもあった。（佐藤春夫「僕の知つてゐる荒川義英」大正９　＊堺利彦編・荒川義英著『青年の手記』社会文芸叢書Ⅱ所収）

など。

※ 用例の引用にあたっては，『重訂解体新書』からの引用を除き，旧字体表記のものは新字体表記に改めた。